



2011.3.11 東日本大震災

# 現地支援委員会

ニュースレター

「第10号」

2013年12月11日

全国の諸教会の皆様、日頃から祈りと献金によるお支えをありがとうございます。東北では寒い雪の季節が始まり、震災から三度目の冬を迎えています。被災された方々の生活と健康が守られるようにお祈りください。今号では、宮城県の元浦屋敷仮設住宅支援、宮前仮設住宅支援の様子をお伝えします。

## 石巻市元浦屋敷仮設住宅支援

☞ (左)ハワイからのボランティアチーム  
☞ (右)タワリー宣教師の出身教会、アーリントンファーストバプテスト教会からのボランティアチーム



### 元浦屋敷仮設住宅支援のはじまり

大富教会は、石巻市内にある元浦屋敷仮設住宅の支援を2011年から続けてきました。この支援は、2011年秋、宣教師ゲルハート夫妻がハワイからのボランティアチームと共に石巻市大街道にあるお店で買い物をしていた時に、元浦屋敷仮設住宅の世話役の方と出会ったことに始まります。この世話役の方に、外国からのボランティアチームの働きについて話したところ、元浦屋敷仮設住宅があまり知られていないせいか、ボランティアの訪問がないという話を聞きました。それを聞いたゲルハート夫妻から大富教会のタワリー夫妻に元浦屋敷仮設住宅を訪れてほしいとの要請で、今日まで元浦屋敷仮設住宅の方々との交流が続いています。



### 外国からのボランティアとの協働

☞ テキサスからのボランティアチームと集会所の前で  
☞ 韓国オンヌリ教会による二回目の訪問

最初はアメリカや韓国からの献金にも支えられ、毛布やヒーターなどをお届けし、2012年春からは海外からのボランティアチーム受け入れの度にこの仮設住宅を訪問し、集会所での交わりの時を持ってきました。ハワイのチームが訪問時にはレイ作りやウクレレを使って日本民謡の演奏、テキサスのチームが訪問時にはビンゴ大会やラインダンス、また韓国チームが訪問時には写真立て作りなどが行われました。海外から派遣される多くの教会から祈りによって送り出されたクリスチャンのボランティアの方々と共に奉仕することができたことは、被災地に立つ教会にとっても、大きな喜びと励みになりました。また、時間が経っても海外からの訪問が継続されていることは、仮設住宅の方々にも慰めになっています。



### 大富教会の継続的な活動として

☞ 仮設集会所で童謡、懐メロで大いに盛り上がる。大富のメンバーが手踊りを披露

海外のチームの訪問がない月にも大富教会で何かできないかと考え、昨年からは二ヶ月に一度のペースで教会員が訪問して一緒にお茶を飲んだり、40世帯の皆さんにお届けものをしたりしています。仮設住宅には高齢の方やご家族と離れて住んでいる方が多いため、教会員の子もたちが訪問すると大喜びして自分の孫のように可愛がってくださり、いつも「また来てね」と見送ってくださいます。元浦屋敷仮設住宅の世話役のご夫妻は、教会員の赤ちゃんが生まれて初めて礼拝に行った日にわざわざ教会までお祝いに駆けつけてくださいました。「教会って素敵なおところですね」というお言葉を聞き、とても嬉しくなりました。



今月はお花と教会の子もたちが書いたクリスマスカードをお届けしました。私たちができることは限られていますが、これからも続けて訪問し交わりを続けていきたいと祈っています。また、一度元浦屋敷を訪問した外国のボランティアから、2014年も再訪問したいとの申し出を受けています。大富教会としての単独の支援だけでなく、海外からの祈りを被災者の方につなげるような働きも続けていきたいと願っています。(大富教会 タワリー優)



## 亘理町宮前仮設住宅支援

☞ (上)亘理町のいちご生産本格化。被災したビニルハウスにて  
☞ (中)被災した家の前で学生に震災当日の様子を語っている様子  
☞ (下)仮設住宅を出て被災した家に戻った方のお宅でのお茶会

### 全国の教会に支えられて

仙台北教会は、月に二回、亘理町宮前仮設住宅を継続して訪問しています。教会から車で1時間程の距離にある亘理町は、宮城県の中でも温暖な気候で、きれいな海岸には毎年サーファーが集まり、食べ物も美味しく、いちごの生産も有名な場所でした。そんな亘理町を愛し大切に生きてきた住民の方々にとって、東日本大震災は物理的なダメージだけでなく、生きがいをも破壊しかねない出来事でした。私たちは、その亘理町の方々に主イエスが寄り添っておられると信じ、少しでも励ましになればと祈りつつ、全国の方々のご支援をいただきながら通っています。



### 震災から千日

☞ 仮設集会所の前で住民の方と

宮前仮設住宅の住民の方々は、それぞれの新しい道のために奮闘しています。被災した家を修理して戻る方、新しい土地と家を求める方、公営住宅に応募する方など様々です。そのことで生じる課題や負担を思うと祈らずにはいられません。85世帯入居可能な宮前仮設住宅ですが、満杯だったところから現在62世帯にまで減りました。嬉しいことではありますが、しかし子どもたちを含め、二年以上一緒に立ち上がろうと励み合ってきた方々との別れに、住民の方々は寂しさも感じているようです。私たちは、転居してからも不安と孤独感が少しでも和らぐようと、仮設住宅を出られた方々の家を訪問することも大切にしています。主イエスによっていただいた出会いをこれからも継続して温めていきたいと願っています。



☞ バザーのためにスーツケースを献品して下さった男性と時間では解決できない痛みを抱えながら、被災された方々は、震災から千日を越えた今を生きておられます。「このままでは忘れ去られてしまう」との危機感から、被災した家に学生を招いて震災当日の状況を語り出した方や、「今度は私が誰かの為に」と教会の世界祈祷週間バザーのために献品して下さる方、もう一度いちごの生産に挑戦している方、二年後に予定されている公営住宅完成をじっと忍耐して待っている方…。この方々を何とかお支えしたいと祈っています。どうか引き続きお祈りとご支援をお願いします。(仙台北教会 金丸真)

